

虫を殺さず

お昼になりました

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マブダチ五条悟と夏油傑の、真夏の青春編

目次

虫を殺さず

1

虫を殺さず

「虫も殺さぬような」って言うけどさア、」

ゴキリと首を鳴らしながら、ふと五条悟が言った。

呪霊の血と泥に塗れて、彼はひどい有様だった。

夏油傑は袖口で汗を拭ってから、「何？」とだけ返す。

二人は1級呪霊討伐の任務を終え、迎えの車を待っているところだった。

「人間が虫を殺すこと前提の言葉でウケる」

「……」

また変わったことを言うな、と傑は思う。

悟は時々、そういうところがあつた。

普通なら素通りするところをピックアップして、子どもみたいな目で揚げ足を取るのだ。

性格が悪いとも思うし、同時に、若い哲学者のようでもある。

「虫なんて、動物でも殺すからだよ」

傑は靴についた泥を見ながら、どうでも良さそうに言った。悟はゆっくり瞬きをし

て、僕がハンカチで靴の泥を拭うのを見る。

「牛だって、そのしっぽで身体に止まったハエを殺すんだ。人間に限った話じゃない。だからこそ、虫を殺さない人間に価値を見出すんだよ。理性は人間の象徴だし」

「理性って人間の象徴なの？」

「エッ？ そりやそうだろ。不思議なこと言うなキミ」

「理屈は動物でも持つてるから」

「……。そう？」

「危険が来れば逃げる、腹が空けば食う。これって秩序だ。秩序は理だろ。それで、ソレがないのが呪霊」

「どうだろう？」

僕はそんな顔をして、悟の方を見た。

呪霊を操る術式を持つ僕は、いまいち領ぎがたいところであった。

呪霊にも性格があるし、好き嫌いくらいはあるだろうに。

「で。話戻すんだけどさ、」

「あ戻すんだ。その話まだ続くんだね」

「おお。俺思ってたんだけど、」

「うん」

「今から虫殺さないようにすつから、一日一回俺のこと褒めるよ」

「嫌だけど」

「……エ!? 何で!?!」

悟はまん丸に目を見開いて、びっくりしたように大口を開けた。

傑は「逆に何だよ」と思って、こめかみの辺りを搔く。

「何でつて……面倒くさいからだよ」

「面倒くさい……? (ポカン……)」

「面倒くさいって言葉を知らない人?」

「それは知ってる。何で褒めるのが面倒くさいの? ひとこと言うだけだぞオマエ。ふ

ざけんなよグータラ前髪!」

「前髪は今関係ないだろ」

「オマエの前髪は何色だ!?!」

「それ血の色を聞くところだね」

「何色なんだよ!!!」

「黒だよ。どう見ても前髪は黒じゃないか」

傑は半目になって悟を見た。

悟は傑が言うことを聞かなかつたのが気に入らないようで、長い手足を使ってしつ

ちやかめつちやかに暴れている。

高校生の駄々は大迫力であった。

死にかけの虫がもがいているようで、傑はちよつとだけ笑った。

「やめなつて泥んこになるよ」

「もうなつてる。俺を止めたいなら褒めてみるよ愚図！」

「あははは。動画撮つていい？ 帰ったら硝子に見せる」

「アア？ このクズが!!」

「アツハツハツハ」

完全に駄々こね五条を見世物だと思つている傑は、カメラを向け続けた。

悟は大蜘蛛みたいにジタバタ暴れて、それから。

それからパチンと、腕に止まった蚊を叩いた。

「ウワツ硝子タバコ吸つてる!!!」

悟はガーン！ と口元を手で覆つて、高専寮の入り口で立ち止まる。

絶妙に邪魔な位置で止まったせいで、傑は悟の後頭部に鼻をぶつけた。

硝子は玄関の隅っこで、しゃがんでタバコを吸っていた。

白いTシャツを伸ばして足まで覆って、三角すわりで丸まっている。体育の学生がよくやるスタイルだった。

素足にゴムサンダルをつっかけて、前髪をピンでとめている。

白く不健康な蛍光灯はチカチカ光って、硝子の丸い頬を照らしていた。

「あ、クズども。お帰り。泥塗れじゃん。私の半径10キロに近づくな」
「もうそれ高専にも入れないね。ただいま」

「良いね。五条高専出禁で」

「んでだよ！ 俺が最強のエースだろーが！」

「呪霊退治はスポーツじゃないんだよ」

「遊び半分でやられてもね」

「ただいまも言えない奴に用はない」

「ウゼエ！ オマエら俺の母親か！ ただいま!!」

カエルの鳴く高専に、ケラケラと笑い声が響いた。

玄関ライトには蛾が一匹止まっていて、時折羽がライトを叩く音がする。

夜風は湿って生ぬるく、硝子は不味そうに煙を吐きだした。

夏の夜である。爽やかで重たい、夏の夜。

硝子がタバコを吸って、焼けた先端が赤く光った。線香花火みたいな光だった。

五条は「イ」と犬歯を見せて、不機嫌そうな顔をする。

「タバコは成人してからじゃね？」

「ふうん。五条ってマトモなこと言えるんだ」

「ふざけんな。てかタバコなんかいつでも吸えんじゃん。成人までとつとけよ」

「いつでも吸えるのに成人までとつとくという矛盾」

「いつでも吸えつからだよ。煙を吸って肺を壊す遊びとか、年取ってからやりやい

じゃんか」

「さどるって喫煙のことそういう遊びだと思ってるんだ」

「突然箱入り息子ムーブでもしてくんのかと思った。あぶな」

「急にね」

「そう。急に。ギャップ萌えかわいいねって言えばいい？」

「オ？ 術式食らうか？ 表出ろコラ馬鹿にしがたって」

「もう出てる」

「ここ表だから」

「じゃあ裏出ろや!!」

「わはははは」

「むり」

——パチン！

硝子は目の前を飛んだ羽虫を捕まえた。

猫がネズミを捕るような動作だった。

「だア——ツクソ!!!」

「ダクソ?」

「先生五条がうるさいです」

「クソだつてんだよ。シツトの方だわ」

「五条、授業中は騒ぐな。あと汚い言葉を使うな」

「今更な話すんなよ夜蛾セン」

「悟が騒いで言葉遣いが汚いのは生まれつきだもんね」

「たりめーだ何言つてやがんだ。赤ん坊はみんな泣いて騒いで生まれてくんだ常識だろーが。オッ? いい加減にしろ」

「態度が最悪すぎる……」

「デカすぎんだろ……(態度が)」

「デカすぎるよ（声が）」

夜蛾は諦めて授業中にぬいぐるみを作り始めた。

もう指導できるもんじゃないので、成績表にちゃんと「留年」と記載したから良いのである。

——窓の外から、蟬の音がうるさい。

空は作り物みたいに青くて、主張が激しい。

鬱蒼と緑生い茂る高専には、信じられないほど巨大な蟬しぐれが降り注いでいた。

傑は耳栓をしながら数学のドリルをやっていたが、悟がデカイ声を出したので耳栓を外した。

つけていても意味がないことに気づいたからである。全くヤツは癩癩玉みたいな男だった。

「この点Pマジで許せねえよ。動くなっつってんだよ。俺が動くなっつたら動くんじゃねえ！」

「拳銃でも構えたらいいんじゃない？」

「警察にでもなれば？」

「おお。ヨシ動くな！ 武器を捨てて手を頭の後ろへやれ！」

「その調子その調子」

「悟の警察ってアメリカ式なんだ」

「そのまま地面に伏せて三回回ってワンツ!!」

「違うものになっちゃった」

「警察じゃなくなった」

「点Pが一体何をしたって言うんだよ」

「公務執行妨害だよ動くんだから」

「どうでもよ」

聡明な硝子はとつとドリルを終えて、教科書のピタゴラスの絵に鼻毛を書いていた。

傑は時折答えを見ながら（解説を読むためだ）、自己流で数学の勉強を進めている。悟だけが、真夏の空と同じ色の目を三角にしていた。

憎き点Pにいちやもんをつけ、椅子から立ってシャドウ・ボクシングの動きをする。

「つつかさア〜、何の意義があんの」

「……それは俺に聞いているのか？」

「当然。センサーでしょ夜蛾」

「今集中してるんだ。話しかけるなら後にしてくれ」

「授業中ぬいぐるみ作りに集中する教師って何？」

「ウケた」

「写メとっていい？」

「女子高生かお前は」

「一人本当に女子高生だけどね」

一人喋ればもう二人もしゃべり出す状況で、夜蛾は深い眉間の皺を揉んだ。

ゆつくりと縫い針を置いて、「意義って何の意義だ」と悟へ聞き返す。

「え。数学だけど。ペンキヨーして何の意義があんの」

「意味のないことを教育機関でやらせると思うか？」

「ここ呪術師の養成学校じゃん。教育機関じゃねーよ」

「教育機関なんだここは。ふざけるな」

「そっちがふざけないでほしいんだけど」

「逆ギレをするな」

「表現の不自由だ！ 言論統制だ！ 人権侵害反対！」

「このクソガキヤ……」

夜蛾は頭を抱えた。

無駄に頭の回る子供が一番扱いづらいのだ。特にこの男は、口を開けば揚げ足取りだから。

「いいか。学校の勉強というのは、大人になった時の話のネタだ」

「ハ??」

「常識的なことを言ってもお前には響かないだろうから、持論を言うぞ」

「ああ。助かる」

「大人になるとな、友達を作りにくくなるんだ」

「今も別に作りやすくはねーよ。生徒3人しかいねえんだから」

「黙って聞け」

「オマエが黙れば?」

夜蛾は悟にヘッドロックをかけた。

この学校にモラルなんぞあつたもんじゃないので、普通に生徒に暴力を振るつた。

モラルのない学生ども二人も、「いいぞいいぞー」などと言いながら笑っている。

「私夜蛾が勝つにジューズ一本」

「じゃあ悟が勝つにお茶をかけるよ」

「夏油趣味シブすぎ」

「お茶美味しいじゃないか」

「ちよマジ、ギブギブギブ!!! 夜蛾テメ、ガチだつてんだよ!!!」

「お前ら学校で賭け事をするな」

生徒に暴力を振るった夜蛾がいけしやあしやあと言った。適当なところで悟を解放してやり、彼は咳ばらいを一つする。

「大人になると、人と腹を割って話す機会が減る。故に、知人は増えても友人が増えない。そういう時にだな、学生時代の思い出がよい材料になる」

「つじで痛かった今。賠償金請求できっかな」

「学生時代の体験は、貴重な共通点だ。誰もが『スイミー』を知っていて、『やまなし』を知っている。点Pに苦しみ、織田信長に髭を生やしている」

硝子が一瞬目を逸らし、数学のドリルを閉じた。

彼女のピタゴラスにも、立派な髭が生やされていたから。

「共通に知っていることがあると、話が通じるから盛り上がるんだ。そうして大人同士で打ち解けて、知人は友人に変わる。小難しいこと抜きにすると、そういうことなんだよ。教育を受ける意義ってものは」

「え？ あごめん。今六法全書見せて話聞いてなかった」

「……」

夜蛾は閉口した。

それから黙って、五条の持つ六法全書を取り上げる。

「オイ！ 教師だからって何しても良いと思うな！ おうコラ！ 職権乱用じゃねーか

！」

「あく夜蛾セン私の携帯も返して」

「私の写経セットも返して」

「オマエそんなん持ってたの？」

「没収された経緯教えて」

夜蛾は長い長い溜息を吐いた。

それから教卓の上に蜘蛛が歩いているのを見て、悟の六法全書で叩き潰した。

「——ところで夜蛾センさ、今度の沖縄遠征の話だけど」

「任務を遠征とか言うな、悟」

「おやつは何万円までオツケー？」

「待て待てケタが違うケタが」

「これだから金持ちは」

「万単位でおやつがいる五条何？」

「虫歯になるから、おやつは300円までにしておきなさい」

「ふーん。小学生のおよつの金額ってそういう理由で決められてるんだ」

「お前に限定された話だよ」

「歯ぐらい磨くわ」

「じゃあ私スタンプカード作るからキミ歯磨いたらハンコ押しな」

「嫌だけど??」

「え? 何で??」

傑は悟の目を見ながら、視界の端に影が横切るのが見えた。

小さな羽虫である。

羽虫はふよふよと空を漂って、円を描きながら傑の傍にいた。

「うわ、なんか虫いる」

「ハ? 潰せそんなもん」

「どこ? てか高専虫出すぎじゃない?」

「虫コナーズ経費で落ちねえの?」

「はあ。落ちてたまるかそんなもの。いいからお前ら、早く寮に戻れ」

「ケチ!」

傑は悟たちの会話に笑いながら、手で虫を軽く追い払った。